



定五郎橋

東日本建設業保証株式会社
建設産業図書館
江口知秀
Tomohide Eguchi

「重県に女人堤防というのがあるよ」と同行者が教えてくれた。さらに「自分の首を絞めようだけど、人柱伝説がある竜ヶ池というため池もあるよ」という。地図を見ると両所とも鈴鹿市にあり、そして交通機関をあまり当てにできない地域のようだ。同行者の許容歩行距離は一日一五キロほどなので、確かに自分の首を絞めたことになる。

私は取材対象が決まると周辺の地図をじっくり見ることになっている。意図しない面白そうなものが見つかるからだが、案の定、女人堤防から三キロほど離れた場所に「定五郎橋」という橋があった。鈴鹿市の弓削町と上野町を結ぶ鈴鹿川に架かる橋だ。一級河川の大きな橋に人名が付されているのは珍しい。調べてみると、前川定五郎という人物に由来する橋だとわかった。

彼は天保三（一八三二）年に鈴鹿郡甲斐村（現在の鈴鹿市甲斐町）の田中庄五郎の三男として生まれ、十八歳のときに同じ町内の前川定八の養子となったが、養家は借金を抱えており、明治十九（一八八六）年に五十四歳で息子に家督をゆずるまで、懸命に働く日々を送った。

さて、定五郎の住む甲斐村付近は鈴鹿川の水が浅く、歩いて渡れる渡し場となっていたが、明治二十

九年の大洪水で川底の土砂が流されて、渡渉が困難となってしまった。すると、定五郎は小舟を買って人々を渡し始めた。しかも無料で。

しかし、舟では人馬を満足に通行させることができない。すると定五郎は少しずつ寄付を募り、長さ三〇間余（約五五メートル）、幅一尺二寸（約三六センチ）の仮橋をかけてしまった。

しかし、彼の苦勞にも関わらず、この橋はほどなくして流されてしまった。すると定五郎は、またもや寄付を募るため奔走し、翌年には再び橋を架けてしまう。今度は長さ六八間（約一三三メートル）、幅四尺（約一・二メートル）という立派な橋だった。それだけではなく、毎日橋を見回り、壊れた箇所があれば自分で修理した。

しかし、交通量が多くなってくると、この橋でも不便を感じるようになった。すると定五郎は、またもや寄付を募る一方で関係町村や鈴鹿郡長に新たな橋の必要性を訴え、ついに明治四十一年に長さ一三六間（約二四五メートル）、幅一〇尺（約三〇メートル）という堅牢な橋ができあがった。この橋は彼を讃えて、定五郎橋と命名された。もちろん、その後も彼は毎日橋を見回り、その維持保全につとめ、自らは清貧に甘んじたという。

まるで日本昔話に出てきそうな話だが、為政者ではなく裕福でもない一村民の彼を、一銭の得にもならないことに何が駆り立てたのか。一つ考えられるのは、先代の意思を継いだということだ。生前の定五郎は、彼の先代がどうしてもこの場所に橋を架けなければならぬと語っていたと話している。まあ、だからと言って誰でも同じ真似をできるわけではない。あれこれ勘ぐってしまう、自分を恥じるべきか。



前川定五郎翁彰徳碑
現在の定五郎橋の南側の堤防下にある

[交通] JR関西本線 加佐登駅より徒歩約20分